

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

文化遺産保護劇団化する百年劇団・西安易俗社の光と陰：保護と継承をめぐるある伝統演劇劇団の葛藤

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 拓野 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006066

第11章 文化遺産保護劇団化する百年劇団・ 西安易俗社の光と陰

― 保護と継承をめぐるある伝統演劇劇団の葛藤 ―

清水 拓野
関西国際大学

建造物のような有形のものと比べて、芸能、儀礼・祭礼、工芸技術などの無形文化は、人を媒介として伝承される形に残らない文化実践なので、とりわけ現代中国のような時代の移り変わりが激しい社会では、意識的に保護しないと相対的に失われやすい。その意味で、こうした無形のものが無形文化遺産に登録されて、保護・保存の対象となるのは、大変喜ばしいことである。ところが、無形文化遺産の保護に乗り出して日が浅い中国では、いまだに政策的な矛盾が多々あり、無形文化遺産の保護と継承においてさまざまな支障をきたしている。本稿は、伝統演劇・秦腔の西安易俗社という有名劇団を事例として、無形文化遺産の保護・伝承の現場でどのような実際問題がみられるかを報告するものである。事例の検討をとおして、演劇界の当事者たちが直面する保護と継承をめぐる現実と迫るとともに、いかに今後の発展と活性化につなげていくべきかという問題についても考えてみたい。

- | | |
|------------------------|---------------------|
| 1 はじめに | 6 無形文化遺産保護劇団化の意義と課題 |
| 2 秦腔とは | 7 考察 |
| 3 秦腔演劇界の歩み | 8 おわりに |
| 4 百年劇団・西安易俗社の歩み | |
| 5 西安易俗社の無形文化遺産保護劇団化の背景 | |

キーワード：秦腔、西安易俗社、無形文化遺産、文化体制改革、伝統演劇

1 はじめに

近年、中国では、国家の主導で、芸能の無形文化遺産への登録が活発に行われている。建造物などの有形のものと違って、形に残らない芸能という伝統文化を保護するうえで、無形文化遺産化することは、一定のメリットがある。特に、芸能の多くが、現代中国の時代の流れのなかで翻弄され続け、衰退化してしまったものもある、という事実を考慮すれば、人々の保護と保存の意識を高める無形文化遺産化は、喜ばしいことである。ただし、無形文化遺産化するのは、ひとつの出発点であり、最終目標ではない、ということも忘れてはならない。無形文化遺産化した芸能の何をどのように保護・保存していく

のか、さらに芸能を存続させるだけでなく、いかに今後の発展と活性化につなげていくのか、という点も考える必要があるだろう。

本稿では、陝西地方に伝わる秦腔^{しんこう}と呼ばれる伝統演劇を事例として、芸能の無形文化遺産化をめぐるこうした問題について考察する。ここでは、西安にある秦腔演劇界の有名劇団・西安易俗社に焦点を絞って動向を分析したい。京劇などの他の多くの伝統演劇と同様に、秦腔も革命時代には政治状況に左右され、さらに改革開放時代の初期には、娯楽の多様化に影響を受けて、幾度も存続の危機に瀕するほど衰退化してきた。しかし、2006年に国家レベルの無形文化遺産に登録されてからは、秦腔に対する人々の保護・保存意識が一層高まり、状況は少しずつ好転しつつある。秦腔演劇界は、無形文化遺産化をひとつの契機として、秦腔を活性化させようと、新たな一歩を踏み出しつつあるのである。そうした秦腔演劇界の動向のなかで、近年ひとつの大きな盛り上がりを見せているのが、人々の長年の願いと努力が実って2014年に無形文化遺産保護劇団になった西安易俗社の存在である。これは、百年の歴史を有し、秦腔演劇界の象徴として期待される劇団である。

ところが、秦腔は、無形文化遺産に登録されるまでに、時代の荒波にもまれてかなりのダメージを受けてきたので、本格的に活性化させるのは容易ではない。とりわけ、西安易俗社は、せっかく無形文化遺産保護劇団になったにもかかわらず、現在では西安秦腔劇院という劇団の一部となっており、かつての独立した劇団ではなくなっている。そうした状況では、公演活動や人材育成にも制約がかかり、秦腔の今後の発展と活性化に貢献するのは困難なのである。本論文では、この西安易俗社の動向を中心に、無形文化遺産化の過程で状況が以前よりも好転しつつも、政策的な矛盾によって秦腔の伝承がどのような具体的問題に直面しているかを取りあげる。そして、秦腔演劇界の人々が、無形文化遺産化をめぐる理想と現実の狭間で、どのような状況に置かれているかを報告したい。

2 秦腔とは

まず、秦腔という芸能について簡単に述べておきたい。中国には、四川省の川劇や河南省の豫劇といったように、各地にその土地の言葉で歌われる地方劇があるが、そのなかでも秦腔は、中国西北地域（おもに陝西省や甘粛省など）でとりわけ盛んな地方劇である（図1）。中国伝統演劇といえば、有名な京劇を連想する人が多いだろうが、秦腔は少なくとも16世紀末ごろから存在し、形成期の京劇（18世紀末）にも影響を与えたといわれているほど、中国伝統演劇史に名を残している古い地方劇である〔陝西省戯劇志編纂委員会編（魚訊主編）1998：134；蘇 1996：319〕。

秦腔の芸能的特徴に関しては、中国語で“戯曲”と呼ばれる京劇や川劇などの他の伝

統演劇とだいたい共通している [cf. 涂沛・蘇移ほか 2000; 嚴主編 2000]。すなわち、秦腔でも、役者は歌（“唱”）、せりふ（“念”）、しぐさ（“做”）、立ち回り（“打”）の四大表現技法を組みあわせて演技をするし、役者の役柄も男性役（“生”）、女性役（“旦”）、隈取り役（“浄”）、道化役（“丑”）の四大役柄とその下位分類に分かれている。また、最近では、他の伝統演劇と同様、秦腔でも新編歴史劇や現代劇などの上演時に大掛かりな舞台セットを使うことも増えつつあるものの、多くの伝統演目では、役者が机や椅子といった最低限の小道具以外は何も使わず、身体ひとつで歴史物語を演じる（写真1）。役者の演技に、弦楽器と打楽器から構成される楽隊の伴奏がつくことも共通している。



図1 陕西省の地図



写真1 秦腔を演じる若手俳優たち

このように、秦腔は他の伝統演劇と多くの特徴を共有するので、外見上は見わけが付きにくい。ただし、中国各地の伝統演劇のあいだのおもな違いは節回しやリズムや音楽に顕著にみられる傾向にあり、たとえば、秦腔の節回しには、昆曲の曲牌形式（“曲牌”を連ねる音楽形式）などとは異なる“板腔体”（“板式”と呼ばれる拍子の組みあわせをもとにした音楽形式）が使われている。さらに、陝西地方を中心に継承・発展されてきた秦腔では、陝西方言（特に関中方言）が役者の歌やせりふの基礎をなしている [呂 1997: 23-26]。なかでも、秦腔の道化役の役者のせりふはその典型例であり、土地の言葉による独特のユーモアが多く含まれているのである。

なお、秦腔は西府秦腔や漢調桄桄や同州梆子などの地域流派に分かれているが《中国戯曲劇種大辞典》編輯委員会 1995: 1537-1555)、本論文でもにも取り上げるのは、西安を中心に継承・発展されてきた中路秦腔（“西安乱彈”とも呼ばれる）である。

3 秦腔演劇界の歩み

次に、秦腔演劇界がこれまでどのような変遷過程を経てきたのかについて述べる。以下では、筆者が調査した陝西地方の状況を中心に、とりわけ大きな変化がみられる中華人民共和国の成立前後から現在までの秦腔演劇界の歩みを概観する¹⁾。

3.1 革命と関わってきた時代

秦腔は、今では国家レベルの無形文化遺産認定を受けているが、かつては政治的思想や政策内容を人民に伝達する手段として用いられるなど、これまで政治と関わりながら複雑な歴史を歩んできた。中華民国期（1912～1949年）までは、秦腔役者は“下九流”（卑しいとされる職業に従事する人）とみなされ、社会的地位や社会保障などもなく、生存ギリギリの貧しい生活を送っていた〔甄・史編 2010: 23-24〕。しかし、秦腔は、1949年の中華人民共和国の建国後、人民（とくに労働者・農民・兵士）に奉仕して、社会主義革命に貢献できるように、俳優の政治意識や境遇（“改人”）、劇団の運営方式や管理体制（“改制”）、演目内容（“改戯”）などに関する演劇改革（“戯曲三改”）を全国規模で行って、より本格的に政治利用されるようになった。この演劇改革によって役者の境遇もよくなり、民国期までの社会下層民としての貧しい生活から脱却できるようになったが、人民に奉仕する戯劇工作者として積極的に政治と関わり始めたのである〔陝西省戯劇志編纂委員会編（魚訊主編）1998: 15-17; 傳 2002: 1-6; cf. 井口 2009: 34-36〕。

ところで、1966年に文化大革命が始まると、秦腔演劇界は、政治的動向に一層強く左右されることになる。文革期（1966～1976年）、秦腔のすべての伝統演目と一部の現代劇は、封建的・資本主義的・修正主義的などとして批判され、人民を政治的に啓発するための革命模範劇と呼ばれる演目（京劇から移植された『紅灯記』、『智取威虎山』、『沙家浜』など）の上演以外は禁止された。また、多くの劇団関係者は、「資本主義の実権派」や「反動的な資産階級の人物」として批判され、職を追われた〔陝西省戯劇志編纂委員会編（魚訊主編）2000: 18〕。秦腔の最高学府・陝西省戯曲学校などのような演劇学校も閉鎖され、俳優育成にも支障をきたした。さらに、たとえば陝西省戯曲劇院（現在の陝西省戯曲研究院）の資料室にあった貴重な秦腔資料や文献なども処分されたりした。このように、秦腔演劇界は、文革中は政治に翻弄され続け、大きな被害を受けたのである。

3.2 改革開放時代の新たな苦難

文革が終わり、改革開放政策が始まると、秦腔演劇界の状況は一変した。端的にいえば、秦腔の政治的色彩は次第に薄れ、娯楽色がより濃厚になっていったが、娯楽の多様化に伴う新たな苦難に直面するようになったのである〔清水 2015: 204-205〕。まず、そ

れまで禁止されていた多くの伝統演目（たとえば『遊西湖』、『中国魂』、『趙氏孤児』など）が上演できるようになり、文革中に閉鎖されていた陝西省戯曲学校なども再開し、再び秦腔の人材育成が行われるようになった。こうした一連の流れは秦腔を発展・活性化させるものと思われたが、その一方で、改革開放政策に影響を受けて、海外の映画やドラマなども含めて娯楽が多様化し、テレビも普及した結果、人々は秦腔にかつてほど興味を持たなくなってしまったのである〔cf. 加藤 2002: 304-305〕。とくに、この傾向は、都市在住の青少年の間で顕著にみられ、彼らはテレビやネットには興味を示しても、わざわざ劇場まで秦腔を観に行こうとはしなくなった。

こうした状況に直面して、中国共産党陝西省委員会と陝西省政府は、1983年に「振興秦腔」というスローガンを打ち出し、陝西省振興秦腔指導委員会を作り、西安易俗社や陝西省戯曲研究院秦腔団などを「実験劇団」として、秦腔の振興活動に本格的に取り組み始めた。ところが、そうした活動は一定の成果をあげたものの、娯楽の多様化の影響による観客数の減少に歯止めがかからず、秦腔劇団の公演収入も減少し、多くの劇団が経営不振に陥ったのである。そして、西安などの都市部での専門劇団による秦腔の公演回数も激減し、筆者の調査当初の2000年には、西安では西安易俗社だけが週一回の秦腔の定期公演をなんとか維持していた。その結果、ついには人員整理のために、劇団の統廃合が行われたのである。たとえば、秦腔がきわめて盛んな西安でも、市内の4つの秦腔劇団が、西安秦腔劇院として2007年6月に合併統合された。その4つの中には、後述する西安易俗社のような有名劇団まで含まれていたため、多くの者に衝撃を与えた。

3.3 無形文化遺産化による新たな展開

このように、近年の秦腔を取り巻く環境は厳しくなっているが、明るい変化の兆しも表れつつある。そのひとつの契機となったのが、秦腔が2006年に「第1回国家級無形文化遺産リスト」に選定され、国家レベルの無形文化遺産に登録されたことである〔陝西人民出版社項目組（編）2008〕。その背景には、改革開放政策による高度経済成長を経て自国文化に対する自信が強まり、かつての革命時代のように、中国政府が伝統文化を「封建的で、時代遅れの、近代化を阻害するもの」とあるとはみなさなくなり、逆にそれを伝統的な価値を体現する貴重な文化遺産として再認識し始めた、という事情がある〔櫻井・阮ほか 2011: 6-9; 周 2014: 168〕。

中国の無形文化遺産登録の動向は、さらにユネスコの無形文化遺産の保護条約にも影響を受けている〔加治 2008: 187-188; 宗 2013: 120〕。中国は、それまで文化部の指導の下で、貴州で中国民族民間文化保護プロジェクト活動会議を開いたり、雲南で中国民族伝統文化保護プロジェクト活動交流会を開催したりしていたが、2004年にユネスコの採択した「無形文化遺産保護条約」に正式加盟して、国内の関連する法律の整備を進めた〔白 2009: 37; 周 2014: 169〕。中国の無形文化遺産保護に関する立法プロセスは、そ

うした国際条約の影響を受けたものであり、その後中国では無形文化遺産の保護活動が一種のブームとなったが、秦腔の無形文化遺産化はその流れのなかに位置づけられる。

そして、こうした無形文化遺産化をきっかけに、秦腔の保護と保存をめぐる動きもさまざまな形で活発化してきている。まず、2009年5月には、秦腔の芸風を後世に伝えるために、政府が流派の伝承人を決めて秦腔の伝承活動を奨励するようになった。実績や芸歴に応じて、秦腔演劇界の11人の名優が伝承人として選ばれ、国からの補助金をもらい、文化を伝承・伝播する法的責任を負って、弟子への教育活動もより積極的に行うようになったのである〔西安市文化局主管 2009a〕。これは、政府が秦腔関連の文物だけでなく、伝承人の保護も重視し始めたことを意味する（写真2）。



写真2 伝承人に選定された秦腔俳優とその弟子たち

また、2009年9月には、政府の出資で陝西秦腔博物館が西安で開館した。この博物館は、秦腔の歴史や芸能の特徴などを幅広く紹介するために、陝西省文化庁と西安交通大学が共同で設立したものであるが、設立の際には多くの人の関心と呼び、大いに盛り上がった〔清水 2015: 207-209; 西安市文化局主管 2009b〕。設立を主導した陝西省文化庁の振興秦腔弁公室が、博物館の設立前に、展示のための文物の収集を新聞などで呼びかけたとき、博物館の建設計画を知って大いに喜んだ人々が、家に代々伝わる秦腔関連の文物をこぞって無償で提供したのである。遠方の農村から文化庁までわざわざ何往復もして文物を直接届けにきた熱心な者までいた。そして、振興秦腔弁公室の担当者は、収集した文物のあまりの多さに、多忙になりすぎて体調を崩してしまったという〔成 2009: 14〕。

さらに興味深いことに、陝西省と同じく秦腔が盛んな甘粛省の蘭州にも秦腔博物館が

あり、陝西秦腔博物館と開館日を競うような形で設立された〔劉 2008: B9〕。そもそも陝西省と甘肅省は、ともに秦腔がきわめて盛んな地域であり、秦腔の発祥地の所在などをめぐって長らく熱い議論を戦わしてきた仲である。したがって、西安と蘭州における秦腔博物館の設立競争も、秦腔の無形文化遺産化を発端とした両都市間の主導権争いと解釈できるが、双方の秦腔演劇界の人々はメディアに煽られて互いを意識しつつも、相手よりも少しでも早く良い博物館を建設しようと躍起になっていたのである。こうした事態も、秦腔の保護と保存をめぐる動きがそれだけ盛り上がっている、ということの表れだろう。

かくして、これまで秦腔は、時代に翻弄され、さまざまな苦難を経てきたが、無形文化遺産化したことによって注目度が上がり、人々の保護と保存の意識も一層高まったようである。第4節以降で取りあげる西安易俗社の無形文化遺産保護劇団化は、こうした文脈のなかで実現したことであり、今まで暗いニュースが多かった秦腔演劇界に明るい話題を提供している。

4 百年劇団・西安易俗社の歩み

さて、流派传承人選定や博物館設立関連の活動で秦腔演劇界が盛り上がるなかで、近年さらに人々の注目を集めているのが、2014年に無形文化遺産保護劇団となった西安易俗社の存在である。以下では、その基本動向を紹介する。まず、西安易俗社とはいかなる劇団であり、これまでどのような歴史を歩んできたのかについて概略を述べておきたい。

4.1 西安易俗社とは？

西安易俗社とは、1912年（民国元年）の辛亥革命時に、当時の戯曲改良運動（伝統演劇に民衆を啓蒙する役割をもとめた愛国主義運動）を背景として、陝西同盟会会員の李桐軒や孫仁玉などといった進歩的知識人たちによって西安に設立された秦腔劇団である。当時は、陝西易俗伶学社（以下、現在の「西安易俗社」という名で呼ぶ）と呼ばれていたが、学識の豊かな指導者たちによって運営されていたので、技芸の伝承だけではなく、役者の教養教育（読み書きや算数などの基礎教養）も非常に重視していた。そして、劇団の指導者たちは、伝統演劇をとおして民衆を啓蒙し、古い風俗習慣を改めて、社会教育を補助するという高い理想をもっていた〔陝西省戯劇志編纂委員会編（魚訊主編）1998: 539〕。

つまり、西安易俗社は、単なる公演組織ではなく、公演活動をとおした民衆教育を目標とする劇団だったのである。8カ国の列強による侵略や清政府の腐敗問題などに直面していた当時の演劇界は、伝統演劇によって民衆の旧態依然とした思想・習慣を改め、愛国主義の精神を高めようとしたが、西安易俗社の設立もそうした目的をもっていた。

したがって、このような高い理想を実現するために、西安易俗社には付属の俳優教育組織があり、芝居の稽古のみならず、国文や習字や数学などの教養教育を教えて役者の素養向上に努めていた。この点において、西安易俗社は、公演活動に追われて技艺訓練だけを行う傾向にあった当時の他の秦腔劇団よりも先進的とみなされていた。実際、秦中社、化民社、正俗社、秦鐘社、鳴盛社など、西安とその近郊の県に当時存在した民営劇団の多くは、西安易俗社のこうした教育方針に少なからず影響を受け、それを積極的に模倣したという〔焦・閻 2005: 224-226; 陝西省戲劇志編纂委員会編（魚訊主編）1998: 524〕。なお、西安易俗社は、設立当初、秦腔の名優・陳雨衣や著名な京劇俳優の唐虎臣といった人物を師範として迎え入れ、解放前の1949年までの期間に限っても、13期計600人あまりの俳優を養成した〔陝西省戲劇志編纂委員会編（魚訊主編）1998: 541〕。

このように、西安易俗社の俳優教育は秦腔演劇界で一目置かれるものであったが、脚本創作でも注目を浴びてきた。西安易俗社は設立以来、時代に即した啓蒙的な演目を演じるために、李桐軒、孫仁玉、高培支、範紫東、封至模などといった民主思想をもち、文学の修養がある者たちによって、独自の脚本を創作してきた。彼らは、たとえば、当時の悪習とされていた、女性の纏足、アヘン吸飲、売買婚、幽霊や妖怪の信仰、賭博などを戒め、愛国主義の精神を宣揚する演目を数多く創作した。代表的なものとしては、『三回頭』、『三滴血』、『奪錦樓』などがあり、民国期に創作されたものだけでも大小700以上もの演目がある〔陝西省戲劇志編纂委員会編（魚訊主編）1998: 539-540〕。

4.2 西安易俗社の歩み

西安易俗社のこれまでの歩みについて、民国期（1912～1949年）、中華人民共和国の建国当初から文革まで（1949～1966年）、文革後から現在まで（1978～2014年）の3時期にわけて概観する。以下の記述内容は、表1でまとめている。

民国期のおもな出来事としては、1924年に魯迅が西安易俗社の演目をみて絶賛したことがまずあげられる。魯迅は、20日間のうちに5度も観劇し、非常に感銘を受けて「古調独弾」という扁額を贈ったといわれている〔西安市記念易俗社70周年弁公室編輯組編選 1982: 30-31〕。一方、西安易俗社は、独自に創作した啓蒙的・愛国的な演目を携えて、中国各地へ巡回公演を行った。1921年の漢口公演を皮切りに、1930年代には2回の北京公演を行って、梅蘭芳、尚小雲、馬連良、齊如山といった京劇界の著名人たちからも好評を得た。その後も、山東、山西、河北、河南、安徽などの地域を巡回公演して、西安易俗社の名を世に知らしめた〔何編 2010: 105-117〕。この時期の西安易俗社は、伝統演劇をととして民衆を啓蒙する、というその目的を全国規模で積極的に遂行していたのである。

1949年の中華人民共和国の建国後、西安易俗社は、革命文芸事業に奉仕するために国営化された。そして、その流れのなかで、風紀の乱れを考慮して女子生徒を受け入れな

いというそれまでの旧習を改め、1949年入学の第14期生から女優の養成を行うようになり、張咏華、全巧民、肖若蘭などの有名女優を数多く輩出した〔何編 2010: 198-199〕。また、1953年3月には、西安易俗社のおもな俳優たちは、中国人民赴朝慰問文芸工作第五団に参加し、慰問上演のために朝鮮戦争の前線に赴いた。さらに、建国初期のこのころには、西安易俗社の演目内容は、第3節で述べた演劇改革（「改戯」）の一環として、新中国の時代的特色に合うように整理改編された〔蘇主編 1992: 90-114〕。この他、1950～60年代には、王天民、肖若蘭、劉毓中といった俳優たちが、全国第1回戲劇觀摩大会を始めとする数々の催しで受賞し、西安易俗社の名をさらに高めた。なお、文革中は、西安易俗社も混乱に巻き込まれて、正常な運営が出来なかったことをつけ加えておこう〔蘇主編 1992: 84-85〕。

文革後は、1979年ごろから公演活動を再開した。その年には、北京で建国30周年記念公演があり、西安易俗社は『西安事変』という演目で創作賞をとるなど好成績を収めた。また、1981年には、京都市長の招待を受けて、西安易俗社の数名の俳優と楽隊人員は、西安市秦腔訪日友好演出団の一員として、京都や奈良で来日公演をした。さらに、1998年には、韓国の慶州市政府の招待を受けて、数名の俳優が西安市の訪韓芸術団とともに慶州市世界文化博覧会新羅芸術祭に参加した〔何編 2010: 227-229〕。このように、文革後も西安易俗社は活発に公演活動を行ってきたが、一方で俳優教育事情の方は大きく変わった。かつてのように付属の俳優教育組織で人材養成をすることがなくなり、西安市芸術学校などに俳優育成を任せるようになったのである。そして、1984年に、その学校から、後に中国戲劇梅花獎（伝統演劇の役者に与えられる最高の賞）を受賞する戴春榮も含めた55人の卒業生が西安易俗社に加わり、文革の影響で人材養成が中断され、果たせなかった劇団の若返りを実現した〔陝西省戲劇志編纂委員會編（魚訊主編）1998: 544〕。同校からは、1999年にも20数人の卒業生が加わり、西安易俗社を若いエネルギーで活性化させた²⁾。

表1 西安易俗社の関連年表

年代（西暦）	出来事
1912年	李桐軒や孫仁玉などによって西安易俗社が創立される
1924年	魯迅が西安易俗社の演目を観劇し、「古調独弾」の扁額を贈る
1930年代	二回の北京公演をとおして、梅蘭芳、尚小雲、馬連良、齊如山などの京劇界の著名人から好評を得る
1949年	西安易俗社が国営化され、女優の養成も行ようになる
1953年	朝鮮戦争の前線に赴き慰問上演をする
1950～60年代	西安易俗社の俳優たちが全国第1回戲劇觀摩大会などで受賞する
文革期	社会的混乱のため通常運営が出来なくなる
1981年	京都市長の招待を受けて、京都や奈良で来日公演をする
1998年	韓国の慶州市政府の招待を受けて、慶州市世界文化博覧会新羅芸術祭に参加する
2007年	文化体制改革により、西安秦腔劇院傘下の劇団となる
2014年	国家レベルの無形文化遺産・秦腔の保護劇団となる

ところが、1980年代半ばごろから、改革開放政策がもたらした娯楽の多様化やテレビの普及などによって、秦腔を観劇する人の数が減り、秦腔は不振状態に陥った [cf. 陳 2003]。そうしたなかで、西安易俗社も次第に経営が苦しくなった。そこで、西安市政府は、2005年に、専門劇団の統廃合と人員整理によって状況を打開しようと、西安市内にあった西安易俗社、三意社、五一劇団、秦腔一団の四劇団を合併統合し、西安秦腔劇院とした。そして、2007年 6 月には、この西安秦腔劇院は正式に西安曲江新区管委会の管理下に置かれ、企業化の道を歩むことになった [何編 2010: 259-268]。こうした劇団の統廃合と企業化のことを現地では文化体制改革と呼ぶが、これによって西安易俗社は西安秦腔劇院傘下の一部門となり、独立した劇団ではなくなってしまった。次節で述べる西安易俗社の無形文化遺産保護劇団化は、まさにこのような状況に直面するなかで起こったことなのである。

5 西安易俗社の無形文化遺産保護劇団化の背景

これまで述べてきたように、西安易俗社は時代に翻弄され複雑な歴史を歩んできたが、人々の願いが叶って2014年 1 月に無形文化遺産保護劇団となった。その背景には、秦腔演劇界のいくつかの動向が絡んでいる。では、西安易俗社は、具体的にどのような文脈のなかで保護劇団化したのだろうか。次に、この点について述べたい。

端的に言えば、西安易俗社の保護劇団化の背景には、少なくとも次の 3 つの要素が絡んでいるといえるだろう。まず、秦腔演劇界の人々の西安易俗社に対する深い愛情である。何しろ、西安易俗社は、現存する中国最古の秦腔劇団であり、その百年の歴史のなかで秦腔の継承・発展へきわめて重要な貢献をしてきたのみならず、先進的な劇団として中国伝統演劇界全体のなかでも輝かしい足跡を残してきた。したがって、多くの人々



写真 3 西安易俗社で観劇する人々

は西安易俗社に一目を置いており、深い愛情の念を抱いている。たとえば、秦腔の歴史や芸能的特徴に関する研究書は多いが、西安易俗社の歴史や芸風や俳優などについては頻繁に取り上げられる。また、秦腔演劇界では、西安易俗社出身の俳優や演劇評論家や脚本家は一定の影響を持っており、『西安芸術』、『当代戯劇』、『大秦腔』といった秦腔関連の演劇雑誌にしばしば西安易俗社をテーマとした文章を発表している。さらに、中国三大伝統演劇サイトのひとつにも数えられる中国秦腔網というサイトでも、西安易俗社出身者かファンによる関連の文章の投稿が後を絶たない。このように、西安易俗社に対する人々の強い関心と愛情がまずベースにあるのである。

そうした人々の強い思いがあったからこそ、2007年6月に西安易俗社が西安秦腔劇院の一部となったとき、多くの者がショックを受けた。このとき、人員削減のために、西安易俗社の40才以上の役者が早期退職させられたのであるが、彼らのなかには、衝撃のあまり何か月も何にも手につかなかった者もいた³⁾。役者としてちょうど脂が乗った年齢なのに、舞台に立つ機会を急に奪われたからである。一方、西安易俗社の熱心なファンのなかには、西安易俗社の吸収・合併を惜しむあまり、劇団社長に状況改善を直訴する電話をする者も少なくなかった⁴⁾。これは、2006年に秦腔が国家レベルの無形文化遺産に登録され、西安易俗社に対する保護・保存の意識が高まったこととも関係がある。というわけで、西安易俗社の無形文化遺産保護劇団化の背景にある2つ目の要素としては、秦腔の無形文化遺産化によって高まった保護・保存の意識に突き動かされて、西安秦腔劇院に吸収・合併されてしまった西安易俗社の状況を何とかしよう、とする人々の思いがあげられる。

こうした人々の思いをさらに強化するきっかけになったのが、2012年の西安易俗社創立百周年の記念活動である。秦腔演劇界では、これまでも創立80周年や90周年というように、10年ごとに創立記念を祝う活動が行われてきたが〔蘇主編 1992: 西安市記念易俗社70周年弁公室編輯組編選 1982〕、百周年はひとつの大きな節目ということで、ひと際盛大に祝賀イベントが催されたのである。たとえば、西安易俗社が設立された8月13日の前後には、数週間に渡って劇団内の易俗小劇場などで劇団の代表的な演目を上演した。それには、西安易俗社の現役俳優だけでなく、健康状態が良好で、舞台に立つ元気がある引退した年配俳優たちも参加した。また、ネットサイト・中国秦腔網(写真4)や演劇雑誌『西安芸術』などの秦腔演劇界のメディアは、2011年の暮れごろから、西安易俗社関連の記事をことあるごとに掲載してきた。とりわけ、後者は、2012年の春におよそ400ページに及ぶ特集号を組み、同雑誌で建国以来取りあげてきた西安易俗社関係のおもな記事を網羅的に収録した〔西安市芸術研究所主弁 2012〕。今では、この特集号は、西安易俗社について研究する者にとって貴重な資料となっている。この他、西安易俗社では、創立百周年を祝う記念切手(写真5)、Tシャツ、記念写真集、ドキュメンタリー映画DVDまで制作された。



写真4 演劇ファンが作った西安易俗社百周年記念サイト

このように、2012年の秦腔演劇界は、創立百周年の記念活動で大いに盛り上がったが、これが西安易俗社の無形文化遺産保護劇団化の背景にある3つ目の要素として重要だったのである。こうした記念活動をとおして、人々は西安易俗社の百年の歴史を改めて振り返り、栄光に満ちたその過去に感動し、敬意を払うとともに、もはや独立した劇団ではなくなってしまった現在のあり様をきわめて残念に思い、次世代に芸風などを継承できないのではないかという危機意識を覚えたのである。だからこそ、西安易俗社の状況を何とかしたいという人々の思いがより強まったといえる。



写真5 創立百周年の記念切手

6 無形文化遺産保護劇団化の意義と課題

これまで、西安易俗社が無形文化遺産保護劇団となった背景について述べてきたが、保護劇団となることでどのようなメリットがあり、いかなる課題を残しているのだろう

か。ここで、この点に目を向けたい。

まず、保護劇団化のメリットであるが、今や西安秦腔劇院の一部となった西安易俗社を存続させ、これ以上の解体を防ぐことにある、といえるだろう。2007年6月に、三意社、五一劇団、秦腔一団と合併統合して西安秦腔劇院となって以来、西安易俗社の構成員は大きく変化した。人員削減のために40才以上の役者が早期退職し、若手俳優や楽隊人員ばかりになったのである。また、芸風が異なる他の三劇団と合併したことで、西安易俗社独自の芸風を維持することも難しくなっていた。そして、こうした事態をもたらした文化体制改革⁵⁾に対して、秦腔の発展と継承に悪影響を与えるとして現地では批判の声も多いが、西安易俗社が保護劇団化したことで、その劇団文化がこれ以上失われることは回避できるだろう。

もちろん、保護劇団化することで、政府からの補助金ももらえるようになったし、西安易俗社文化の保護・発展をめぐる取り組みも活発化しつつある。たとえば、西安易俗社に現存する1000冊あまりの脚本、約300冊の社史関連資料、および、数千枚の写真などを整理したり、劇団の芸風を伝える伝承人を選定して教育活動に励ましたり、といったことが行われている。西安易俗社の代表演目や年配俳優の得意演目を撮影して記録に残す、ということも積極的に行われている。このように、保護劇団化は、西安易俗社の芸風を次世代に伝えるための最低限の条件を整えてくれる。さらに、西安易俗社は、秦腔演劇界では代表的な劇団であり、秦腔の継承・発展にこれまで多大なる貢献を果たしてきたので、保護劇団という形で甦ることが不振状態にある近年の秦腔の活性化にも貢献する、と期待されているのである。



写真6 無形文化遺産保護劇団となった西安易俗社



写真7 保護劇団になったことを祝する記念公演

一方、保護劇団化した後も、西安易俗社はさまざまな課題を抱えている。もっとも深刻なのは、後継者育成の問題である。すでに述べたように、かつての西安易俗社は、付属の俳優教育組織で人材を育成する劇団であった。特に民国期には、技芸訓練だけでなく、教養教育も行う先進的な劇団として、時代の先端を行っていた⁶⁾。近年（改革開放以降）は、自前で人材養成する代わりに、西安市芸術学校などと提携して俳優養成する

ようになったが、それでも優秀な人材の確保に成功している。ところが、西安秦腔劇院の一部となってからは、かつてのような自前の人材養成組織を立ち上げることもできなくなり、他の三劇団と合併統合して衰退が著しい西安易俗社に卒業生を送り出そうという演劇学校もなくなってしまった。その結果、2014年現在、西安易俗社は、最後に西安市芸術学校の20数人の卒業生を1999年に受け入れて以来、新たな若手俳優を補充できていないのである。

西安易俗社は、こうした後継者育成の問題を抱える一方で、40才以上（2007年当時）の役者の不在という現実にも直面している。政府主導の文化体制改革で一旦こうなったからには、状況を変えるのはきわめて難しいが、まだ20～30代の若手俳優が年配俳優の円熟した演技を間近でみる機会が以前よりも限られてしまっているのは、芸の修業にとって望ましくないことである。確かに、保護劇団化して以降、西安易俗社の芸風の伝承については、传承人の選定や彼らの代表演目の撮影などをおして、ある程度まで行われるようになった⁷⁾。しかし、若手俳優たちは、西安易俗社が独立した劇団であった2007年以前ほど、公演や稽古などを共にして日常的に上の世代の俳優から学ぶという機会に恵まれていない。

7 考察

最後に、これまでの記述内容を踏まえて、西安易俗社の保護劇団化が秦腔演劇界の人々にどのような希望をもたらし、いかなる現実を突きつけているかについて取りあげる。また、それらが秦腔の伝承にどのような状況をもたしているかについても考察する。

端的に言えば、有名劇団・西安易俗社が保護劇団化したことは、秦腔演劇界の人々にとって大変喜ばしいことである。西安易俗社はこれまでの百年間、秦腔の継承・発展に多大な貢献をしてきた象徴的な劇団だからである。長年の不振で秦腔演劇界は悲観的になり、すっかり自信を失っていたが、西安易俗社という秦腔のひとつの象徴がこうして甦ることで、少しずつ自信と誇りを取り戻しつつある。秦腔演劇界には、三意社や陝西省戯曲研究院など、西安易俗社と同様に秦腔の継承・発展に重要な貢献をしてきた、建国前から存在する古い劇団が他にもあるが、西安易俗社の保護劇団化は、こうした劇団への人々の保護・保存の意識も確実に高めることだろう。

ところが、第6節でも取りあげたように、西安易俗社は後継者育成の問題に直面しており、今後の発展では困難を抱えている。新たな若手俳優を定期的に補充しないと、西安易俗社の新陳代謝はできないからである。そして、このことは、秦腔演劇界の人々に、西安易俗社という個別の劇団を超えた、よりマクロな現実問題も突きつけている。すなわち、秦腔（西安易俗社も含む）が時代の荒波にこれまで散々もまれて、無形文化遺産化しても容易に発展が促進できないほどダメージを受けてきた、という現実である。ま

た、政府によるそうした秦腔の窮状に対する文化体制改革などの措置が、秦腔のような伝統演劇の特徴を十分に考慮して行われていない、ということである。

まず、前者の点に関して、秦腔演劇界の人々の多くは、西安易俗社の保護劇団化が少し遅かったと感じている。西安易俗社は、文革時代のダメージ⁸⁾に加えて、改革開放政策がもたらした娯楽の多様化やテレビの普及などによって、1990年代にはすでに経営がかなり苦しくなっていたが、保護劇団化したのは2014年になってようやくのことである。多くの人々は、西安易俗社が2007年に西安秦腔劇院へと吸収・合併される前に保護劇団化すべきであった、と思っている。さらに、彼らは、西安易俗社が独立した劇団ではなくなった今となつては、公演活動や人材育成にも制約がかかるので、かつてのように秦腔演劇界を牽引するような劇団に戻るのはきわめて難しい、とも感じている。

一方、後者の点については、秦腔演劇界の大半の人々は、政府の役人たちが秦腔の継承・発展サイクルの特徴を十分に理解していない、と思っている⁹⁾。たとえば、秦腔の演技術はきわめて複雑で、その習得には長い年月がかかるので、役者は数十年の舞台経験を経てこそ、円熟した演技を披露し、後進にも良い手本を示すことができる¹⁰⁾。しかし、先述の文化体制改革では、そうした点には配慮せず、40才以上の役者を早期退職させてしまった。また、秦腔劇団の若返りは、年齢的なバランスを考慮して、だいたい10年間隔で行うことが理想であるとされるが、文化体制改革は、西安易俗社が10年近くも若手俳優を補充していなかったにも関わらず、2007年の西安秦腔劇院への吸収・合併によって劇団の若返りの機会を奪ってしまった。というわけで、秦腔演劇界の多くの人々は、こうした点において、政府の役人たち（必ずしも伝統演劇の愛好家ではない者も多く含む）の秦腔に対する理解不足を感じているのである。紆余曲折を経ながらも明治時代から文化遺産・文化財の保護に取り組んできた日本の場合とは違って、ユネスコなどの影響を受けて比較的最近になって文化遺産の保護に本腰を入れ始めた中国では、現場に対するこうした配慮不足もまだ仕方がないことなのかもしれない [cf. 岩本 2007]。

ところで、秦腔演劇界の人々は、こうした深刻な現実問題にも関わらず、秦腔（西安易俗社も含む）の保護・保存だけを重視しているわけではない。それを何とか発展させ、活性化したいとも願っている。確かに、秦腔演劇界の人々のなかには、秦腔はもはや「博物館で文物として陳列されるべき芸術＝博物館芸術」となってしまったので、以前のように勢いを取り戻し、活性化することはきわめて難しい、と悲観的に考えている者もある。とはいうものの、不振状態にあるなかでも、秦腔は今でも多くの人に愛されており、アマチュア劇団や愛好家の上演活動は活発である。最近では、ネット上での愛好家どうしの交流（特に微信などのSNSを介した交流）も盛んであり、ほぼ毎日何らかの演劇関連のやり取りをしている。

したがって、秦腔はすぐに「博物館芸術」になりそうな状態にあるわけではないし、とりわけ2006年に無形文化遺産化してからは、受動的にそれを保護・保存するだけでは

なく、新しい脚本の創作や演劇大会の開催などをとおして、それを活性化させようという機運も以前よりさらに高まりつつある。西安易俗社に限ってみても、現劇団社長の惠敏莉が中国戯劇梅花獎を近年獲得して、看板役者として活躍しているので、劇団も再び注目を浴びつつある。また、文化体制改革によって40才を超える役者がいなくなったが、早期退職した年配俳優のうちまだ健在な者（伝承人に選ばれた年配俳優以外も）に依頼して、短期講座を開いて若手俳優に芸を伝承する機会をしばしば作っている。文化体制改革がもたらした役者のいびつな年齢構成を変えることはきわめて難しいが、出来る範囲内で西安易俗社の芸風の継承・発展を促進しようとしているのである。

8 おわりに

本稿では、無形文化遺産保護劇団となった西安易俗社の事例を中心として、ポジティブに変わりつつある伝統演劇界の現状を報告した。芸能の無形文化遺産化は、人々の保護・保存の意識を高めるので、大いに喜ばしいことである〔笹原 2015: 14-16; 齋藤 2014: 14-15; 清水 2015: 214-215〕。秦腔の場合もそうであり、西安易俗社も保護劇団になってから、状況が好転しつつある。

ただし、芸能としてのバイタリティを保つためには、受動的に継承するだけではなく、時代に即応した形で発展させ、活性化していくことも重要である。この点に関しては、さまざまなイベントで披露するために舞台化した「アイヌ古式舞踊」や、外国人観光客向けに公演回数や公演時間まで変化したベトナムの水上人形劇などの事例報告も示している〔桎永 2014; 齋藤 2014〕。そして、筆者は、芸能の発展と活性化のためには、芸能の歩んできた歴史を振り返り、芸能そのものの特徴（人材育成に手間暇がかかるなどといった特徴も含め）を正確に把握するとともに、時代に翻弄されてこれまでどれだけのダメージを受けてきたかも理解しなければならない、という点もさらにつけ加えて強調したい。芸能の発展と活性化は、そうした知識にもとづいたものでなければならないだろう。

本稿の西安易俗社の事例が示すのは、政府が無形文化遺産の保護に乗り出してまだ日が浅く、芸能に対するそうした理解が必ずしも十分ではない状況で文化体制改革が行われ、それによって劇団の発展・活性化に苦勞する秦腔演劇界の人々の姿である。そもそも芸能のような無形文化遺産は、口伝による知識・技術の正確な伝授の困難性から、純粹に伝承していくことは不可能であり、日本の獅子舞や田楽の事例研究も示すように、伝承過程で実践者のオリジナルなものの挿入もしばしばみられる〔笹原 2015: 14-16; 宗 2013: 122-124; 藤田 2007; cf. 金子 2007〕。本稿は、そうした特徴を持つ芸能の伝承がただでさえ難しいのに、そこに行政側からトップダウンで災いが降りかかってきた場合はどのような状況になるのか、ということを示している。

中国の文化行政も無形文化遺産政策に関してはまだ模索段階ということもあり、現在のところ、西安易俗社が今後どこまで活性化し、秦腔のさらなる革新にどれだけ貢献できるかは定かではない。そもそも20世紀初頭の戯曲改良運動を背景として設立された西安易俗社の時代的役割もすでに終わった、という者さえいる。とはいっても、近年の無形文化遺産化をめぐる一連の流れによって、生存だけではなく、発展や活性化の問題にも目を向けられるほど、衰退の一途を辿っていた秦腔と西安易俗社が復興しつつあるのは、当事者にとっても大きな希望であるといえるだろう。また、秦腔演劇界の人々の西安易俗社に対する愛着ぶりをみると、劇団の活性化へのさらなる貢献にも期待できそうである。文化体制改革の流動性も含めて、その意味でも、西安易俗社の動向は、今後とも目が離せないのである。

注

- 1) 筆者は、陝西省の西安とその近郊農村で、2000年9月から秦腔に関する調査を継続してきた[清水 2005, 2006b, 2011; Shimizu 2010]。本論文で報告する西安易俗社の事例は、おもに2012年9月、2013年9月、2014年9月の調査結果にもとづいている。
- 2) この世代の役者たちは、筆者の調査当初(2000年9月)に西安易俗社へ配属されたばかりだったので、何度も取材したことがある。
- 3) この時期、筆者は何人ものこうした役者に取材をしようとしたが、今はちょっとショックを受け過ぎて取材を受けられないと、大半の者に拒否されたことがある。また、何人かの者は、その後も数年くらいは取材を受けてくれなかった。さらに、彼らのなかには、早期退職後も、秦腔のことが忘れられなくて、民営劇団をみずから組織し、秦腔を演じ続けている者も少なくない。十分な退職金や年金をもらい、生活にも困っていないはずなのに、こうして舞台に立ち続けるのは、秦腔への深い愛があるからに他ならない。
- 4) 2007年9月のある日、筆者が西安易俗社の元劇団社長を取材していたときも、そうした熱心なファンたちからの直訴の電話を社長が何度も受けていたのを目の当たりにした。電話があまりに頻繁に鳴るので、私の取材に支障が出たほどである。彼らが直訴の電話をしてきたのも、西安易俗社を吸収した西安秦腔劇院の演技水準が低く、上演演目も評判がよくなかったからである。
- 5) 文化人類学者・周星は、中国では改革開放政策が始まって以来、文化が革命の対象から保護の対象になるという大転換が生まれ、これまでの経済体制改革による一定の成果から自国の文化に対して自信を持ち、それを見直すこうした文化体制改革が各地で顕著になっている、と指摘する[櫻井・阮ほか 2011: 6-9]。彼も述べるように、文化体制改革による無形文化遺産へのインパクトについては、まだあまり研究がされていないようなので、今後より注目されるべきであろう。
- 6) 秦腔の俳優教育の歴史については、陝西地方の状況を中心にまとめたことがある[清水 2010: 266-270]。
- 7) 秦腔の場合、传承人を選定するときは、役者の等級や演劇大会での受賞歴なども考慮される。西安易俗社の場合も、传承人に選ばれたのは、国家一级俳優の称号を持ち、演劇大会での受賞歴もあり、西安易俗社で長年勤めてきた重鎮の俳優である。この点は、コミュニティや集団の

なかで脈々と伝えられてきたので、誰を传承人に選定したら良いのかははっきりしない民族音楽などとは異なる〔cf. 福岡 2015: 15〕。また、传承人の選定過程においては、太田〔2013〕が太湖流域漁民の賛神歌の事例で指摘するように、候補者の経歴や能力の誇張などもありえることは想像に難くないが、秦腔の場合は役者の等級や受賞歴というより客観化・可視化された基準があるので、客観的評価の難しいシャーマンのな力量も関係する賛神歌の実践者とは違って、相対的にそうした誇張はしにくいだろうと思われる。

- 8) 文革のダメージについては、たとえば雲南省麗江ナシ古楽団の調査をした宗〔2013: 121〕も指摘するように、弾圧や“下放”（田舎や農場での農業生産活動）などで特定世代の育成に支障をきたす「年齢の断層現象」が顕著である。西安易俗社の場合も、文革中は人材育成や人員補充が出来なかったが、さらに当時は革命模範劇しか演じられなかったもので、その頃に舞台デビューしたばかりの世代は、その前後の世代よりも様式性が重視される伝統演目の上演が不得意だといわれている。彼らのなかには、文革後に演劇学校にしばらく戻り、伝統演目をわざわざ学び直した者もいる。
- 9) 文化遺産政策に携わる役人が現場の実情を十分に把握しているとは限らないという問題は、民族音楽学者の福岡も指摘するところである〔福岡 2015: 15〕。だからこそ、現場に精通する研究者の役割もますます重要になってくる。
- 10) 筆者は、秦腔の俳優教育に関する調査研究をこれまで行ってきたが、拙稿〔2006a, 2007a, 2007b, 2012〕では俳優養成や芸の習得の大変さについて詳述している。ところで、俳優教育現場の実情を知る者として、筆者は次の点を取りわけ痛感する。すなわち、役人の多くは、総合芸術である秦腔の演技術が、他の多くの無形遺産文化の分野（舞踊、絵画、工芸、歌など）の関連技術よりも相対的に遥かに複雑であり、習得に多大な時間と手間暇がかかることをよく理解していない、という点である。

参考文献

●日本語文献

井口淳子

- 2009 「声と音による「革命」の表象——農村の曲芸（語り物）を中心に」韓敏編『革命の実践と表象——現代中国への人類学のアプローチ』pp.29-51、東京：風響社。

岩本通弥

- 2007 「現代日本の文化政策とその政治資源化——「ふるさと資源」化とフォークロリズム」山下晋司編『資源人類学02 資源化する文化』pp.239-272、東京：弘文堂。

太田 出

- 2013 「太湖流域漁民の香頭と賛神歌——非物質文化遺産への登録と創り出された「伝統」」氷上正・千田大介・山下一夫ほか著『近現代中国の芸能と社会——皮影戯・京劇・説唱』pp.31-63、東京：好文出版。

慇永真佐夫

- 2014 「主役は人形なのか、人なのか？——ベトナムの水上人形劇」『月刊みんぱく』5月号、pp.14-15。

加治宏基

- 2008 「中国のユネスコ世界遺産政策——文化外交にみる「和譜」のインパクト」『中国21』29:

183-202。

加藤 徹

2002 『京劇——「政治の国」の俳優群像』東京：中央公論新社。

金子守恵

2007 「手指を使って土器をつくる——エチオピア西南部アリ女性職人による身体技法」菅原和孝編『資源人類学09 身体資源の共有』pp.125-155、東京：弘文堂。

齋藤玲子

2014 「「アイヌ古式舞踊」の多様なかたち」『月刊みんぱく』11月号、pp.14-15。

櫻井龍彦・阮雲星・長谷川清・周星・長沼さやか・松岡正子

2011 「座談 開発と文化遺産」『中国21』34: 3-28。

笹原亮二

2015 「踊る獅子——埵田神社の青獅子舞」『月刊みんぱく』1月号、pp.14-15。

清水拓野

2005 「教育を再文脈化する——身体技法の習得過程からみた演劇学校」山下晋司・福島真人編『現代人類学のプラクシス——科学技術時代をみる視座』pp.267-279、東京：有斐閣。

2006a 「演技習得の人類学的エスノグラフィーにむけて——身体技法論からみた中国西安市の秦腔教育」『演劇研究センター紀要』Ⅵ・早稲田大学演劇博物館（早稲田大学21世紀COEプログラム：演劇の総合的研究と演劇学の確立）、pp.157-168。

2006b 「秦腔の俳優教育からみた中国伝統演劇の世界——演劇をつうじた文化理解のために」朱浩東編『観光・環境・共生——比較思想文化論集』pp.109-127、東京：三一書房。

2007a 「徒弟制教育研究からみた現代中国の伝統演劇教育——秦腔の俳優教育における師弟関係の分析を中心に」『演劇研究センター紀要』Ⅷ・早稲田大学演劇博物館（早稲田大学21世紀COEプログラム：演劇の総合的研究と演劇学の確立）、pp.163-176。

2007b 「中国の伝統演劇にみる芸能教育の未来像——秦腔の俳優教育の「素質」に注目して」朱浩東編『人間形成の課題と教育——論集』pp.147-174、東京：三一書房。

2010 「現代中国の「科班」の特徴と展開——陝西地方の三つの民営演劇学校の考察」『中国21』33: 263-282。

2011 「市場経済時代の演劇リーダーたちの挑戦——秦腔の振興活動をととした文化の継承と発展」朱浩東・今井康雄・清水拓野ほか編『教育の情報・協同・共生』pp.13-28、東京：中山出版。

2012 「中国伝統演劇の教授・学習過程の教育人類学的研究——秦腔演劇学校の「口伝心授」実践に注目して」『演劇映像学：演劇博物館グローバルCOE紀要』2011年第2集（早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム：演劇映像の国際的教育研究拠点）、pp.113-133。

2015 「博物館建設と学校設立にみる伝統演劇界の再編過程：陝西地方・秦腔の事例から」韓敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』pp.199-224、東京：風響社。

周超（周橋訳）

2014 「中国の「無形文化遺産法」」『中国21』39: 167-180。

宗ティンティン

2013 「中国無形文化遺産の保存と継承に関する一考察」『貿易風——中部大学国際関係学部論集』第8号、pp.120-124。

白庚勝

- 2009 「中国の無形文化遺産保護」独立行政法人 国立文化財機構『第30回文化財の保存・修復に関する国際研究集会報告書 無形文化遺産の保護——国際的協力と日本の役割』pp.35-40、東京：東京文化財研究所 無形文化遺産部。

福岡正太

- 2015 「無形文化遺産と音楽研究」『月刊みんぱく』2月号、pp.14-15。

藤田隆則

- 2007 「歌舞が儀式的なものとなる機構——西浦田楽に見られる「離脱」と「放置」」菅原和孝編『資源人類学09 身体資源の共有』pp.157-188、東京：弘文堂。

●英語文献

Shimizu, Takuya

- 2010 “Attractive Features and Potential Value of the Chinese Traditional Theater School as a Tourist Spot: A Case Study of the Shaanxi Opera in Xi'an City.” In Han, M. and Graburn N. (eds.) *Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies*. pp.55-75, Osaka: Senri Ethnological Studies 76.

●中国語文献

陳建森

- 2003 『戲曲与娛樂』上海：上海人民出版社。

成 霞

- 2009 「秦腔博物館——首批參觀券搶先看」『陝西廣播電視報』9月24日、p.14。

傅 謹

- 2002 『新中国戲劇史』長沙：湖南美術出版社。

何桑（編著）

- 2010 『百年易俗社』西安：太白文芸出版社。

焦文彬・閻敏学

- 2005 『中国秦腔』西安：陝西人民出版社。

劉 慧

- 2008 「蘭州“搶建”国内首個秦腔博物館」『華商報』5月9日、B9面。

呂自強

- 2005 『秦腔音樂概論』西安：太白文芸出版社。

陝西人民出版社項目組（編）

- 2008 『第一批陝西非物質文化遺產圖錄 第四輯 地方戲曲類、曲芸類』西安：陝西人民出版社。

陝西省戲劇志編纂委員會編（魚訊主編）

- 1998 『陝西省戲劇志・西安市卷』西安：三秦出版社。

- 2000 『陝西省戲劇志・省直卷』西安：三秦出版社。

蘇育生

- 1996 『秦腔藝術談』西安：西安出版社。

蘇育生主編

- 1992 『易俗社八十年 1912-1992』西安：三秦出版社。

涂沛・蘇移ほか

- 2000 『京劇常識手冊 上』北京：中国戲劇出版社。

西安市記念易俗社70周年辦公室編輯組編選

1982 『西安易俗社70周年資料匯編』西安：内部資料。

西安市文化局主管

2009a 『大秦腔 陝西省第一批秦腔項目代表性傳承人伝習交流展演專刊』第10期、西安：人民日報西安印務中心。

2009b 『大秦腔 陝西秦腔博物館開館記念專刊』第12期、西安：人民日報西安印務中心。

西安市芸術研究所主弁

2012 『百年風流 西安易俗社百年華誕記念專刊』第2-4期合刊、西安：陝西恒豐印務包裝有限公司。

嚴福昌主編

2000 『川劇芸術引論』成都：巴蜀書社。

甄業・史耀增（編著）

2010 『秦腔習俗』西安：太白文芸出版社。

《中国戯曲劇種大辞典》編輯委員会

1995 『中国戯曲劇種大辞典』上海：上海辞書出版社。